

〈論文〉

トールランスの創造性テストの再考と試行IV

—— 大学生対象の調査と分析 ——

Reconsideration and trial of Torrance's creativity test IV :

—— Survey and analysis of college students ——

櫻井 晋 伍

SAKURAI Shingo

(福岡県立大学)

犬童 昭 久

INDO Akihisa

(九州ルーテル学院大学)

王 寺 直 子

OHJI Naoko

(認定こども園あかさかカレッジ)

栗山 裕 至

KURIYAMA Hiroshi

(佐賀大学)

白石 恵 里

SHIRAISHI Eri

(大分県立芸術文化短期大学)

丁 子 かおる

CHOJI Kaoru

(和歌山大学)

樋口 和 美 前 村 晃

HIGUCHI Kazumi

(福岡女子短期大学)

MAEMURA Akira

(佐賀大学名誉教授)

2023年11月13日受理

Abstract

This paper is a study of children's creativity development based on the Creativity Test by E.P. Torrance (1915-2003). In this study, we conducted a drawing development and creativity demonstration survey of college students and a survey of behavioral characteristics of college students in their early childhood. Based on the results, we captured the relationship between drawing and behavioral characteristics and discussed the factors necessary to foster rich creativity. The results suggest that in order to develop and demonstrate creativity, educational support that fosters a positive attitude toward things from early childhood.

1. 目的

本研究は、E.P.トールランス(1915-2003)による創造性テスト¹⁾をもとにした子どもの創造性育成に関する研究であり、子どもの造形表現における創造性について描画及び日常の行動特性の関わりから調査し、その特徴や傾向を明らかにすることを目的としている。

これまで、認定こども園の年長児(5~6歳児)^{2,3)}と公立小学校の4年生(9~10歳児)⁴⁾を対象として調査を行ってきたが、今回は青年期(18~21歳)の傾向分析を行うために、F大学の大学生を対象として、描画発達・創造性発揮調査と、対象大学生の幼児期における行動特性を調査した。その結果をもとに、描画と行動特性の関わりを分析し、豊かな創造性を育むために必要となる要因について考察した。

なお、本論文は、第45回美術科教育学会兵庫大会における口頭発表「トールランスの創造性テストの再考と試行IV—大学生対象の調査結果及び幼児・児童との比較—」の内容をもとに作成した。

2. 方法

本研究では、創造性が日常の行動特性に関連すると仮定していることから、大学生を対象に自己評価による幼児期の行動特性に関する調査を実施した。そのうえで、幼児・児童を対象に実施した調査研究と同様の手法で大学生の描画と行動特性の関連を分析することで、創造性の特性と傾向を考察した。

2-1. 対象と調査期間

今回の調査は、F大学の保育者養成課程在学学生を対象として、筆頭著者が担当している造形表現関連科目の授業時に実施した。2021年7月には、1年生12名、2年生7名、3年生3名に調査を行った。また、2022年7月には、1年生15名に調査を実施し、計37名の調査結果を収集した。

2-2. 倫理的配慮

本研究の実施にあたり、対象大学生には研究の目的について説明した。データは研究の目的以外には使用しないこと、データ管理は筆者が責任をもって行うこ

と、研究へ協力することによる不利益は生じないことを伝えた。また、研究への協力の有無によって成績評定に影響が無いことを明示するために、科目の成績評定開示後に研究協力同意書及び同意撤回書を提示し、本研究への協力を依頼した。その際には、筆者が対象大学生に対して直接依頼を行うのではなく、本研究に携わっていない他の専任教員から依頼することによって、自由意思による研究協力となるように配慮し、同意を得た者のデータのみ用いて本稿の執筆を行った。

2-3. 描画調査と評価

使用した調査課題は幼児・児童を対象にした調査と同様の4種類(図1)を使用した。

具体的には、描画発達を調査する課題については、BBCの放送大学と日仏共同研究の描画発達調査の課題⁵を参照し、創造性発揮を調査する課題はトランスの創造性テストに準拠して、筆者らで作成した。なお、描画材料にはボールペンをを用い、描画時間は各課題につき20分間以内とした。

各課題(描画発達調査課題I・II及び創造性発揮調査課題I・II)の内容と設問に関しては、以下のとおりである。

【描画発達調査課題I】

串刺しソーセージの写真を見て、どのように描画するか調査した。

設問「どうぶつ ゆうがた やきとりやさんに いきました。しゃんのような そーせーじを たけぐし(たけのほそいぼう)で さしとおしたものがありました。したのしかくのなかに このえをかいてください」

【描画発達調査課題II】

おやつ準備のお手伝いの状況について、設定されたモチーフなどをどのように描画するか調査した。

設問「おうちのなかに しかくい て一ふるが あります。いちばんなかよしのおともだちと おやつ の じゅんぴ の おてつだいを しています。て一ふるのうえに さんどいっちと じゅーす

の はいった こっぶを おいています。おともだちと おやつ の じゅんぴ の おてつだいを しているようすを えにかいてください。」

【創造性発揮調査課題I】

未完成の記号模様(曲線)を使って、どのような描画をするのか調査した。

設問「このかたちを つかって みんなが おもしろいような おもしろいえを かきましょう。」

【創造性発揮調査課題II】

リスが木の穴から外をのぞいた時に見える景色を、どのように描画するか調査した。

設問「ゆきがとけて はるがやってきました。りすがきのあなから そとをのぞくと なにがみえるでしょう。みんなが おもしろいような おもしろい けしきを かきましょう。」

各描画調査課題における評価の観点については、表1に示す通り、課題毎にi~ivの項目を設定し、各項目をそれぞれ1~5点で評価した。

描画発達調査課題I・IIは、子どもの絵の発達段階に準拠して、発達度によって評価を行った。創造性発揮調査課題I・IIは、トランスの創造性テストにおける4つの評価の観点(①流動性：刺激となる形から、子どもが、どれだけよどみなく速くアイデアを出すか、②柔軟性：描かれた絵が、どれだけ豊かな種類にわたっているか、③独創性：誰でも思いつきそうにないものを考えて描けたか、④入念性：ねばり強く、丹念に描けたか)⁶に準拠して、評価を行った。

評価のプロセスに関しては、筆者ら全員で、全ての描画課題の結果について目を通したのち、1名がプレ評価を行い、それ以外の5名も評価をした。その結果、プレ評価とその後評価は概ね同数値であったことから、評価の数値は妥当であると判断し、プレ評価を除いた評価の平均値を分析データとして採用した。

2-4. 行動観察調査票調査

本研究においては、創造性は子どもの日常の行動特

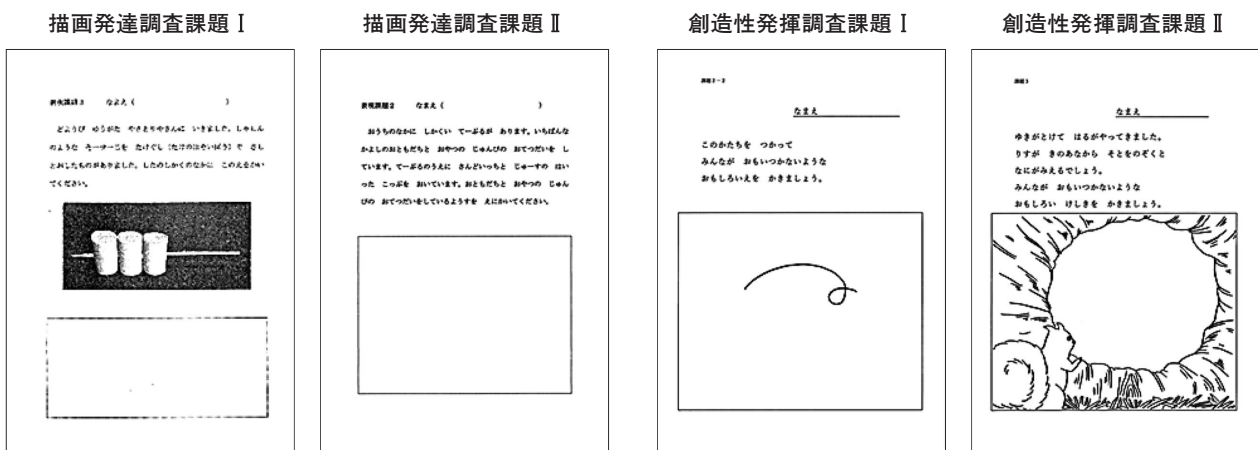


図1 描画調査課題

表 1 各課題の評価の観点

描画発達調査課題 I・II は子どもの絵の発達段階に準拠

| 描画発達調査課題 I <ソーセージの串刺し写真> | |
|---------------------------|--|
| i | 貫通部分が見えない様子を描けているか (レントゲン描法であるかどうか) |
| ii | ソーセージの円筒形を描けているか (上面のみ楕円, 上面と側面のつながり, 側面の形, ソーセージの数, 底面部の形) |
| iii | 串の形状 (太さ, 尖っている) |
| iv | 全体の正確さや丁寧さ, 伸びやかさ |
| 描画発達調査課題 II <おやつの準備のお手伝い> | |
| i | テーブルの形状の描き方 (奥行や重なりを描く・展開図で描く, テーブル脚が四角や角柱・棒状) |
| ii | テーブル上のサンドイッチやジュースの描写 (配置や特徴を詳しく描く・簡単な形で描く・不明瞭, 向きを視点に合わせてる・展開図で描く) |
| iii | 人物の描き方 (形状を正確に描く・頭足人や棒人間) |
| iv | 豊かさや広がり (人物の表情, 周囲の飾りなど) |

創造性発揮調査課題 I・II はトールランスの創造性テストの評価の観点に準拠

| 創造性発揮調査課題 I <未完成の記号模様(曲線)> | |
|-----------------------------|---|
| i | 発想から描画までできたかどうか |
| ii | 曲線と図柄全体の自然な接続 |
| iii | 発想の独創性 (見立ての独自性や機知) |
| iv | 豊かさや広がり (描画の積極性, 表情) |
| 創造性発揮調査課題 II <木の穴から外をのぞくリス> | |
| i | 発想から描画まで展開できたか (楽しんでスムーズに描く・困難や混乱) |
| ii | 手前(リス)と奥の世界を関係づけているか (関係を基にしたイメージ・無関係な発想, 描かれる種類の数) |
| iii | 視点や展開の独自性 (視点の転換, 発想の機知) |
| iv | 豊かさや広がり (表情, 明るさ, 感情の伝わり) |

性として現れると仮定している。そのため、幼児・児童を対象とした研究における日常の行動特性についての調査票記述は、描画調査後にクラス担任が記入した^{7,8}。今回は、大学生を対象とした調査であったため、同様の調査票を用いて、大学生が自身の幼児期の行動特性を振り返りながら調査票を記入した。

行動観察調査の内、描画の発達度や創造性に関与している可能性がある 7 項目「好奇心がある」「友だちが多い」「外遊びが多い」「よく絵を描く」「絵本を読むのが好きである」「きまりを守る」「砂場遊びや積み木、ものづくり(工作)を好んでする」でレーダーチャートを作成し、各大学生が発揮した創造性と、幼児期における行動特性との関わりを見た。回答に関しては、「全くそうである」「ややそうである」「どちらでもない」「ややそうでない」「全くそうでない」の 5 件法で求めた。さらに、大学生対象の調査では、別途レポート用紙を配付し、各自の幼児期における行動特性について、振り返りの文章の記述を求めた。

2-5. 分析内容

本稿では、対象大学生の描画発達と創造性発揮の調査結果をもとに、その相関係数を算出した。そして、

散布図に表したうえで、描画発達と創造性発揮における評価の平均値を基に、A~D の 4 つの領域に分類した。A 領域は描画発達・創造性発揮共に平均値以上、B 領域は創造性発揮が平均値以上で描画発達は平均値以下、C 領域は描画発達が平均値以上で創造性発揮は平均値以下、D 領域は描画発達・創造性発揮共に平均値を下回る評価となった大学生である。

そのうえで、A~D 領域毎に 1 名ずつ、特徴的な位置にある大学生を抽出し、描画発達の傾向と、どのような創造性が発揮されたかを見た。また、幼児期における日常の行動特性に関する調査の結果と、幼児期を振り返ってのレポートの記述内容をもとに、各抽出大学生の描画を通した創造性発揮との関わりについて考察した。

さらに、全ての対象大学生の傾向を概観するために、幼児期における行動特性調査の結果を A~D 領域毎に集計し、描画調査における結果との関連について考察した。

3. 結果及び考察

描画発達調査課題 I <ソーセージの串刺し写真> で

は、幼児を対象とした同様の調査⁹においては半数以上にレントゲン描法が見られ、児童を対象とした調査¹⁰においては1名に確認出来た。そして、今回の大学生対象の調査においては、レントゲン描法は1名に見られたが、貫通部分が見えないような串刺しソーセージを、枠外に再度描いていた。この結果からは、ボールペンで描いたことで後ほど修正をすることが出来なくなったため、課題の意図を確認したうえで、枠外に再度描き直したと推測できた。また、描画発達調査課題II〈おやつ準備のお手伝い〉では、奥行きを意識した画面構成が多数を占めており、展開図的描法は1名のみ用いていた。

以上のことから、F大学における描画調査の結果からは、全体的に年齢相応の描画発達を確認することが出来た。

3-1. 描画発達調査課題

大学生は、頭足人を描いていたケースも見られたものの、描画発達の度合いが低いということではなく、意図的にイラストのようなイメージで簡略化して描いたり、人物をより可愛らしく描こうとしたりした結果であったことが見て取れた。そのため、幼児・児童における頭足人の表現とは異なる傾向があると捉えることが出来た。

また、評価の留意点として、描画発達調査課題はあくまで描画発達の状態をみるのが目的であるため、発想の豊かさなどのアイデアが創造的であるかどうかといった観点からの評価はしなかった。

3-1-1. 描画発達調査課題I

〈ソーセージの串刺し写真〉

この調査課題は、串刺しソーセージの写真を見て模写をする課題である。調査の結果、37名中レントゲン描法は1名見られた。また、9名がソーセージの円筒形断面を描いていた。

串の表現については、37名全員が串の太さと先端の尖りを表現出来ていた。

幼児・児童の場合は、ソーセージを円筒形ではなく楕円や円、四角形等の簡単な記号模様で表現した絵が見られた¹¹⁻¹²。また、串がソーセージに貫通していない状態であったり、串に刺さったソーセージを何パターンも描いたりするケースも見られた¹³⁻¹⁴。その一方で、大学生の描画では、ソーセージの円筒形の形状をよく見て描く意識が働いており、串の太さや長さについても写真に近い形で表現されている傾向が見られた。

3-1-2. 描画発達調査課題II

〈おやつ準備のお手伝い〉

この調査課題では「おやつ準備のお手伝い」という状況を設定し、食卓のテーブルやジュースの入ったコップ、サンドイッチ、自分と友達をどのように描くかを見た。

37名中34名が、指定された全てのモチーフを描画出

来ていた。また、テーブルの脚の奥行きや重なりを描いた者は29名、室内の装飾を描いていた者は13名、頭足人に近い簡素な人物を描いた者は3名、展開図的表現でテーブルを描いた者は1名であった。

そして、衣服の装飾など、モチーフの細密描写も見られた。その一方で、幼児・児童のようなモチーフを描き並べたようなカタログ式の表現¹⁵⁻¹⁶は見られなかった。

3-2. 創造性発揮調査課題

創造性を調査する課題は「みんながおもしろいようなおもしろいえ(けしき)をかきましょう」と新規性や独自性を求める設問とした。トランスの創造性テストにおける評価の観点に準拠して、表現された創造性の豊かさを見た。

創造性が高いと評価された大学生は、表現しようとしたイメージを明確に持っていた印象があり、第三者にテーマ等の意図が伝わるように描画することが出来ていた。その一方で、創造性が低いと評価された大学生は、人物の表情が乏しかったり、描かれたモチーフの数が少なかったりする傾向が見られた。また、課題に関心を持てなかったためか、人物を頭足人のように簡略化して描いていたような事例も一部に見られた。

3-2-1. 創造性発揮調査課題I

〈未完成の記号模様(曲線)〉

この調査課題では、枠内に描かれている曲線を用いて、誰も思いつかないような面白い絵を描くことを求めた。調査の結果、全員が人物や動物等の一部として曲線を活用し、作品を描くことが出来ていた。幼児・児童対象の調査で見られたスクリブル状に線を重ねたような描き方¹⁷⁻¹⁸をした大学生はおらず、全員が課題の意図を理解して描いていた。

人物等の表情の豊かさといった表現力や、描画における手数等の積極性には個人差が見て取れた。

3-2-2. 創造性発揮調査課題II

〈木の穴から外をのぞくリス〉

この調査課題は、雪が解けて春を迎えた頃、木の巣穴から外をのぞいたリスが見た面白い景色を描くことを求めている。調査の結果、全員が設問の意図に沿ってモチーフを描いていた。人物や動物を描いた事例は37名中31名、植物を描いた事例は26名、昆虫を描いた事例は13名であった。また、木の穴にいるリスに呼びかけているような状況は15名が描いていた。

なお、幼児・児童対象の調査結果のようなカタログ式表現や、何を描いているか明確でない描画¹⁹⁻²⁰は見られなかった。

3-3. 描画調査の傾向分析

F大学生37名に対する描画発達調査と創造性発揮調査に対する評価結果をもとに相関係数を算出したところ、弱い正の相関が認められた($r=0.395$)。

また、描画調査の結果について全体的な傾向を把握

するために、全ての対象大学生の描画発達と創造性発揮における評価結果の平均値を算出した。そして、A～Dの4つの領域に分類し、散布図上に示した(図2)。各領域に属する大学生は、A領域12名、B領域9名、C領域6名、D領域10名であった。

さらに、図2には、描画発達と創造性発揮の分布を把握しやすくするために斜線を挿入した。斜線より上にいる大学生は、創造性発揮よりも描画発達の評価の方が高かったことを示す。その一方で、斜線より低い位置にいる大学生は、描画発達よりも創造性発揮の評価の方が高かった者である。本調査では、描画発達の評価の方が高かった者は22名、創造性発揮の評価の方が高かった者は15名であった。この結果から、対象大学生の場合は、創造性発揮よりも描画発達の評価が高い者の方が多かったことが分かる。そのため、描画による発想の独創性や、視点や展開の独自性といった創造性よりも、形状を正確に描くことや、モチーフの特徴を描写する等の技能を表現した者が多数を占めていたと言える。この結果について、幼児・児童を対象とした研究においては、描画発達よりも創造性発揮の評価の方が高い子どもが多数であった^{21,22}ことから、描画を通じた創造性の発揮は、特に幼児・児童期に顕著に現れる傾向があると考えられる。

3-4. 抽出大学生の分析

図2の各領域から特徴的な位置にある大学生を1名ずつ抽出し、計4名の傾向分析を行った。A領域からはF2-1、B領域からはF1-10、C領域はF1-8、D領域からはF2-6を抽出した。

また、表2では、4名の描画調査の結果と共に、各自の自己評価による幼児期の行動特性をレーダーチャートで示した。

さらに、抽出大学生自身による幼児期の振り返りのレポート記述も参考にすることで、各抽出大学生の幼児期における行動特性の傾向について考察を行った。

(1)F2-1(A領域)

F2-1は、対象大学生37名の中で描画発達において最も高い評価を得ており、創造性発揮も全体で2番目に高い評価であった。人物の描き方からは、自分の絵柄を持っていることが窺えるため、普段から絵を描き慣れていることが見て取れた。

描画発達調査課題I(以下、描画I<ソーセージ>)では、串の長さや太さを適切に表現できており、ソーセージの陰影も丁寧に描いていた。描画発達調査課題II(以下、描画II<おやつ準備>)では、奥行きや前後関係を意識して、テーブルと人物2名を描くことが出来ていた。また、右側の人物に汗を描き足すことで、急いでジュース等を運んでいる様子を表現していた。

創造性発揮調査課題I(以下、創造性I<曲線>)では、曲線をリボンに見立てているのか、子どもがダンスを踊っているような様子を描いていた。創造性発揮

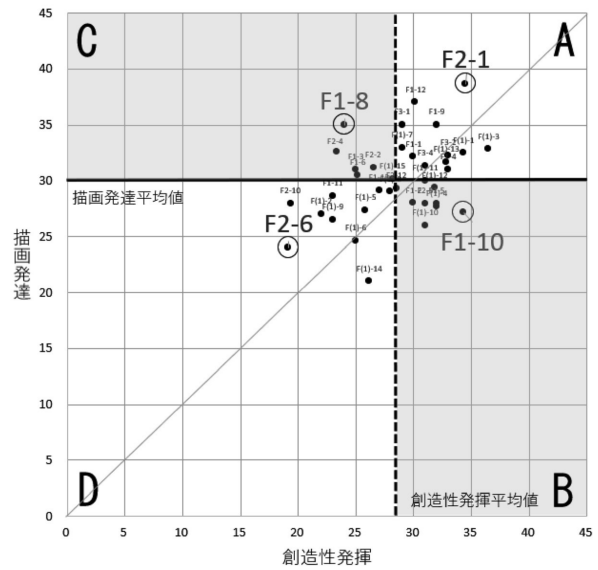


図2 F大学調査対象者の散布図

抽出大学生4名は、太字で大きく示している。

調査課題II(以下、創造性II<リス>)においては、人物が穴を覗き込んだときに、リスを発見した驚きを表現していた。

行動特性を示したレーダーチャートでは、全ての項目で3～4点の自己評価をしており、各項目の点数に大きな開きは見られなかった。自身の幼児期を振り返ったレポートからは「母が絵をよく褒めてくれたり、作品を飾ってくれたりしていたので、どんどん絵が好きになった。」と記されていた。周囲の人からの言葉かけによって、絵を描くことが好きになり、自身の絵の描き方を獲得していったことが窺えた。

(2)F1-10(B領域)

F1-10は、B領域の中で創造性発揮の評価が最も高く、全体的に独創的な絵を描いている印象があった。その一方で、描画発達に関しては2番目に低い評価となっていた。

描画I<ソーセージ>では、お皿、湯気、ソーセージの脂身を描くなど、写真以上の情報量を想像して描いており、自身のイメージを織り交ぜた表現をしていた。描画II<おやつ準備>では、サンドイッチを人物の顔よりも大きく描いたり、人物の表情や髪型を特徴的に描いたりしていた。また、既存のキャラクターを模倣して描いていたことが見て取れた。

創造性I<曲線>では、画面いっぱい大きく口を開けた人物を描いており、曲線と口の中の形を繋げてユーモラスな表現をしていた。創造性II<リス>においては、既存のイメージを活用して、人魚姫や魚、ヒトデや蛸などの海の中の生き物を描いていた。F1-10は保育者養成課程の大学生であるため、作品の中に子どもが好みそうなイラストを挿入する工夫をしていたと考えられる。

表2 各抽出大学生の描画結果とレーダーチャート

| 抽出大学生 調査課題 | F2-1(A領域) | F1-10(B領域) | F1-8(C領域) | F2-6(D領域) |
|--------------------------------|---|---|--|---|
| 描画発達 I 〈ソーセージの 串刺し写真〉 |  |  |  |  |
| 描画発達 II 〈おやつ準備の お手伝い〉 |  |  |  |  |
| 創造性発揮 I 〈未完成の記号模様 (曲線)〉 |  |  |  |  |
| 創造性発揮 II 〈木の穴から外を のぞくリス〉 |  |  |  |  |
| レーダーチャート |  |  |  |  |

※レーダーチャート①～⑦：①好奇心がある ②友だちが多い ③外遊びが多い ④よく絵を描く
⑤絵本を読むのが好きである ⑥きまりを守る
⑦砂場遊びや積み木、ものづくり(工作)を好んでする

レーダーチャートからは、「よく絵を描く」「砂場遊びや積み木、ものづくり(工作)を好んでする」という行動特性の自己評価が5点であったため、幼児期に造形的な遊びを好んでいたことが分かった。その一方で、外遊びは少なく、どちらかと言えば屋内での遊びを好んでいたことが窺えた。自身の幼児期を振り返って記述をしたレポートには、「幼稚園では毎年1人につき1冊の自由帳が配られ、自由時間によく絵を描いていた。友人や妹の自由帳を見ると、何も描かれていない白紙の状態が三分の一ほど残っていたが、私の自由帳には余白なくぎっしりと絵が描かれていた。」と記されてい

た。ここからも、幼少期から絵を描くことを好み、造形的な遊びに親しみを持っていたと読み取ることが出来た。

(3)F1-8(C領域)

F1-8は、C領域の中で最も描画発達の評価が高かった。一方で、創造性発揮に関しては、2番目に低い評価となっていた。

描画 I 〈ソーセージ〉においては、丁寧に描いているが、ソーセージの形が円筒形ではなく、シルエットにやや丸みがあるため、観念的に描いていることが見て取れた。また、写真よりも串の長さが短くなってい

た。描画II〈おやつ準備〉では、テーブルの上に大きなお皿を描いており、奥行きを意識してサンドイッチを配置していた。また、人物の表情や服の模様にそれぞれ違いを付けて描いており、描画発達の高さが窺えた。

創造性I〈曲線〉では、同じ曲線の形を計16回使って人物に見えるように描いているが、発想がやや弱い印象もある。創造性II〈リス〉においては、春の季節という設定から、学校の入学式に出席した親子の姿を、校舎や桜並木、入学式の看板などを配置することで細やかに表現していた。

レーダーチャートからは、「きまりを守る」真面目な幼児であったことが読み取れた。また、絵本を読むことが好きであり、好奇心が旺盛だったことも分かった。そして「よく絵を描く」「砂場遊びや積み木、ものづくり(工作)を好んでする」については両方とも3点であったが、自身の幼児期を振り返ったレポートでは、「絵を描くより、粘土で遊んでいる方が多かった。」と記されていた。ここからは、描画よりも立体的な造形の遊びに、より親しみを感じていたことが読み取れた。

(4)F2-6(D領域)

F2-6は、D領域の中で創造性発揮の評価が最も低く、描画発達に関しては2番目に低い評価となっていた大学生である。描画した人物等の表現に消極性が表れていたため、課題に関心が持てなかったことが窺えた。

描画I〈ソーセージ〉では、ソーセージや串の形をよく見て描くことが出来ていた。一方、描画II〈おやつ準備〉では、人物が頭足人で描かれており、サンドイッチやテーブルなどのモチーフも線のみで表現していたことから、量感を意識した描画には至っていなかったことが見て取れた。

創造性I〈曲線〉においては、曲線を用いて流れ星を描いていた。課題として提示された曲線に模した形を複数配置し、星をちりばめて余白を埋めていた。しかし、それらの構成の繋がりには若干見づらい作品となっていた。創造性II〈リス〉では、春の季節感を表現するために、チューリップなどのお花を描いていたが、創造性I〈曲線〉と同様に、構成を丁寧に検討しようとした形跡は認められなかった。

F2-6のレーダーチャートを見ると、全ての項目で3点以上の自己評価であった。「よく絵を描く」「砂場遊びや積み木、ものづくり(工作)を好んでする」はどちらも3点であり、自身の幼児期を振り返ったレポートでも、「絵を描いたり、工作をしたりすることは好きでも嫌いでもなかった。」と記していた。ここからは、幼児期における造形的な遊びに対する関心は、高いとは言えないが、低くもないと読み取ることが出来た。

3-5. 行動特性の傾向分析

対象大学生の幼児期における行動特性について、そ

の全体的な傾向を分析するために、領域別に平均値を算出し、レーダーチャートで示した(図3)。

その結果、A領域は「よく絵を描く」項目が突出して高く、それ以外の項目においても4前後の数値であった。また、B領域とC領域は、全ての項目で似通った数値であった。そして、D領域に関しては、全ての項目で最も低い数値となった。この結果から、A～C領域と比較して、D領域は幼児期に消極的な行動特性を持っていたことが示唆された。

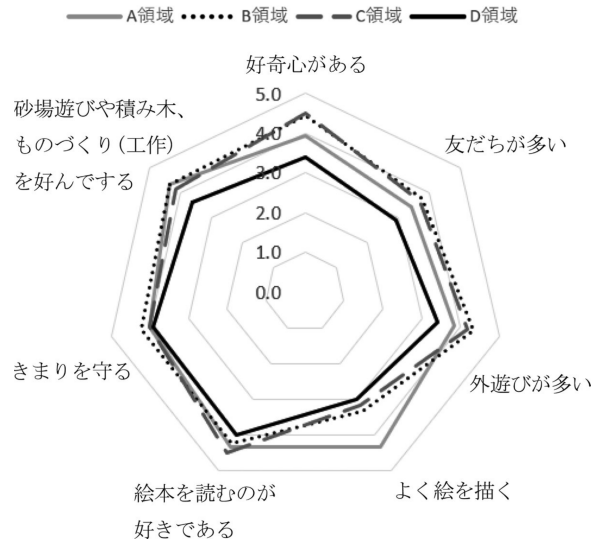


図3 A～D領域の平均値レーダーチャート

その一方で、D領域は「絵本を読むのが好きである」「きまりを守る」の平均値は4程度であった。そのため、物語に親しむことを好んでおり、ルールを守ることへの規範意識がある幼児であったと読み取ることが出来た。

以上のことから、D領域の大学生は、幼児期において行動特性が消極的であり、物事に対する興味・関心はA～C領域と比較すると低かった。この結果から、創造性の育成と発揮のためには、幼児期より興味・関心を幅広く持てるような関わりや、積極性を育むような教育的支援が必要となることが示唆された。

4. まとめ

本研究では、F大学の保育者養成課程在学学生を対象として、トランスの創造性テスト等に準拠した描画調査と、幼児期における行動特性に関する調査を実施した。

筆者らの共同研究では、幼児・児童を対象とした研究^{23,24}があり、それらの研究では描画発達・創造性発揮に関して強い相関は認められなかった。そして、大学生を対象にした本研究においても、先行研究^{23,24}と同様の結果となった。

また、幼児・児童に対する調査結果においては、い

ずれも創造性発揮の評価の方が高い子どもが多かった²⁵⁻²⁶。しかし、今回の調査では、創造性発揮よりも描画発達の評価の方が高い大学生が多かった。この結果から、大学生の場合は、絵を描くときに創意工夫を凝らすよりも、正確に形状を描いたり、奥行きを表現したりするといった技能を表す傾向があると分かった。以上のことから、描画を通した創造性発揮は、幼児・児童期に顕著に表れる傾向があることが示唆された。

そして、対象大学生の幼児期における行動特性についてA～D領域に分類して集計した結果、A～C領域は比較的活発な行動特性が示された。しかし、D領域の大学生は、A～C領域と比較すると行動特性が消極的であることが読み取れた。ここからは、描画を通した創造性の育成と発揮のためには、幼児期より物事への興味・関心を幅広く持てるような教育的支援が必要であると示唆された。

謝辞

本研究にご協力頂いたF大学の保育者養成課程在学学生37名に、心より感謝申し上げます。

【脚注及び引用】

1. 米国の心理学者E.P. トーランス(1915-2003)によって開発された創造性テスト(Torrance Test of Creative Thinking)は、子ども一人ひとりがどのような創造性を持っているのか知るために、主に米国で活用されている。創造性テストの大きな特徴は、子どもが潜在的に持っている豊かな創造の可能性を最大限に引き出し、発展させ、調和のとれた個性を育てる資料を得るための道具ということにある。
2. 樋口和美・犬童昭久・王寺直子・栗山裕至・白石恵里・丁子かおる・前村晃・宮崎祐治(2020)「トーランスの創造性テストの再考と試行I—予備テストから見えてくるもの—」『福岡女子短大紀要第85号』pp.15-24.
3. 白石恵里・犬童昭久・王寺直子・栗山裕至・丁子かおる・樋口和美・前村晃・宮崎祐治(2021)「トーランスの創造性テストの再考と試行II—幼児期(5～6歳児)における調査と分析—」『和歌山大学教育学部紀要 第71集』pp.35-43.
4. 犬童昭久・王寺直子・栗山裕至・櫻井晋伍・白石恵里・丁子かおる・樋口和美・前村晃・宮崎祐治(2022)「トーランスの創造性テストの再考と試行III—児童期(9～10歳児)における調査と分析—」『九州ルーテル学院大学紀要VISIO第53号』pp.9-18.
5. BBCの放送大学の授業ビデオで実施されたリングに串を刺して幼児に描画させ、幼児画の発達の特徴の一つであるレントゲン描法をみる課題と、本共同研究メンバー(前村)が所属していた日仏共同研究(日本学術振興会科学研究費補助金〔課題番号 033010339〕の助成を受けた研究)における描画発達調査の課題を参考に作成。
6. E.P. トーランス(1979)『子どもは翔る—創造性の教育を求めて—』佐藤三郎監修, 日本ブリタニカ, p.95.
7. 白石ら, 前掲書3, p.37.
8. 犬童ら, 前掲書4, p.12.
9. 白石ら, 前掲書3, p.38.
10. 犬童ら, 前掲書4, p.12.
11. 白石ら, 前掲書3, p.38.
12. 犬童ら, 前掲書4, p.12.
13. 白石ら, 前掲書3, p.38.
14. 犬童ら, 前掲書4, p.12.
15. 白石ら, 前掲書3, p.38.
16. 犬童ら, 前掲書4, p.13.
17. 白石ら, 前掲書3, p.38.
18. 犬童ら, 前掲書4, p.13.
19. 白石ら, 前掲書3, p.39.
20. 犬童ら, 前掲書4, p.13.
21. 白石ら, 前掲書3, p.39.
22. 犬童ら, 前掲書4, p.13.
23. 白石ら, 前掲書3, p.39.
24. 犬童ら, 前掲書4, p.13.
25. 白石ら, 前掲書3, p.39.
26. 犬童ら, 前掲書4, p.13.